

[082] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10183>

出版情報：語文研究. 82, 1996-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《會員著書紹介》

瀬里廣明著

『露伴と大拙——儒と禅と念仏の世界』

本書は、既に『文明批評家としての露伴』（未來社・昭四九）等を初めとして、露伴の儒・仏・道を横断する巨大な「東洋的知」としての思想を検証し、そこに漲る反「近代」性を追求し続けてきた著者の、最新の論攷を録したものである。「幸田露伴の仏教思想」「幸田露伴と鈴木大拙」「露伴の『易数』と一切」「露伴の精神世界」の四編を収める。

幸田露伴を西田幾太郎・鈴木大拙という日本近代の生んだ反「近代」的思想家に比することにより、その思想の広汎な射程を明らかにしてきた著者であるが、本書に於いてはそれに加えアリストテレス、ハイデッガー等との比較を通して、所謂東洋精神哲学の範疇を超えた更なる根源的・汎世界的精神哲学としての露伴の思想の可能性を目したかに見える。とりわけアリストテレスと露伴の思想的親近性の指摘は本書の示す新視角であるが、無論両者の直接的な影響関係を必ずしも云々するものではなく、両者に通底する「哲学」の呼応から普遍的な精神哲学を見出す比較文学的な過程と諒すべきものである。こうした時代・国境をも横断しながら各々の思想家に通底する哲学の核心を見出そうとする著者の方法はまさに露伴のそれに比すべきものであろうか。

著者を取り出そうとする露伴の思想は、「雑字の束」等と擲揄されることすらあった露伴の博学と無縁ではない。日常茶飯の極く卑

近なことに始まり、儒・仏・道を通ずる東洋精神哲学にまで至る（或いはそれすら超える）露伴の知識はその全てを包摂しつつ連続しており、卑近なものと同高なものとの間に断絶はない。「喫茶喫飯底を離れて特異靈妙の一物あるに非ず」——露伴の思想の広汎さと捉え難さはそこに起因している。本書はそうした広汎さを捉えようとする著者の一連の論攷の円熟をよく窺い知ることの出来るものと言えよう。

（平成七年七月 白鷗社 A5判 二四八頁 二〇〇〇円）

柏原卓編

『和歌浦物語』

本書は、和歌山大学紀州藩文庫蔵『和歌浦物語』を翻刻、頭註を施し、更に綿密な解説を付して一書としたものである。『和歌浦物語』は乾坤二冊。紀州名高浄土宗専念寺第十四世住職である全長（延享四年（一七四七）入寂）によって編まれたもので、和歌浦及び和歌道沿道の名所について、その名義・由来を考証し、同時にその名所の現状を詳しく記述している。

周知の通り、和歌浦は『万葉集』以来の著名な歌枕であり、同地の玉津島社は和歌三神の一つとして崇敬を集めてきた。その玉津島社が一度は廃れかけたものの、紀州徳川初代藩主頼宣の尽力によって再興された経緯は『和歌浦物語』本文に記されており、それと共にかの地を訪れる人々の層も広がり、文学の題材としても和歌のみならず、漢詩・俳諧・狂歌などに広く取り上げられるようになったことは、本書の「解説」の部に詳しい。伝統的な歌枕の近世紀に於

ける受容の一端が窺えて興味深い。

そうした状況の中で生まれた『和歌浦物語』について編者は、「語学的考証には多少の欠点もなくはない」としながらも、「名所の名義由来考証が詳しく独自のものも含む」、「現状記述が精密で『紀伊国名所図会』などを補うところ大である」とその資料的価値を規定している。そして「和歌浦物語」の成立に影響を与えた先行書を考証する過程に於ける、貝原益軒の『諸州めぐり』が「本書の成立を促し終始対抗意識の対象になる、という形で影響を与えた」という指摘や、著者全長が了誉上人の『古今集序註』を本書の要所に度々引用していることから推測される、同じ浄土宗学僧として先人の響みに倣い自宗の独自性を打ち出していこうという宗教的情熱の指摘など、興味深い指摘が多々なされている。

『和歌浦物語』は、編者が言及している通りこれまでほとんど世に流布していない。それだけに、文学伝統の享受の一端と、江戸中期の紀州における文化の様相とを如実に示してくれる本書の刊行は歓迎されるべきものであり、この種の書物の更なる出現が大いに俟たれるものである。

(平成八年七月 和泉書院 B 6判 二〇六頁 三、六〇五円)

白石良夫著 ちくま新書074

『最後の江戸留守居役』

明治の文人・依田学海の残した膨大な日記『学海日録』が、今井源衛氏をはじめとする諸氏のたいへんな努力のもとに活字化されたことはまだ記憶に新しく(岩波書店 全十一巻・別巻一)、その出

版にまつわる苦勞は、本書の最終章「学海日録」刊行始末」によってもうかがい知れる。『学海日録』編集メンバーの一人であった著者が、大規模な開拓ともいえるその作業の中で、見事に育て上げた収穫物のうちの一つが本書である。

学海が佐倉藩の江戸留守居役に就任したのは慶応三年二月、三十五歳の時であった。そのわずか八カ月後には大政奉還が行われ、明けて慶応四年には鳥羽伏見の戦い、江戸城開城を経て、留守居役は「公議人」と名を変えて消滅する。学海は、まさに「最後の江戸留守居役」として、江戸幕府が瓦解へとむかう二年間を過ごしたのである。著者はその二年間の記録を、文人・学海の「かくされた青春」として読み解き、激動の歴史を個人の視線から生き生きと描き出した。

まず、「剛直の人と留守居役」と題して、職務上の協議と称して高級料亭や遊所で遊興する留守居役の実態へのやり場のない憤懣を日記や漢詩にぶつける様を、次に「江戸留守居の日々」として、留守居組合では孤立しながらも、私的な情報機関である「新聞会」の主催者・武内孫介と交遊を深めていく様を描く。続く「大政奉還と江戸諸藩邸」には、藩主上京辞退の奉書案を作成するも、いささか過激にはしり過ぎる傾向のため、その持参に随行することを止められる学海、「王政復古から戊辰戦争へ」には、諸藩連合軍を編制して京に攻めのぼることを提案する学海、といったように、いずれも明治の演劇改良家としての学海像からは想像がつかない姿がある。その後学海は、慶喜助命嘆願の哀訴状を携えて上京するが、同盟諸藩の脱退などにより嘆願運動は頓挫する。そのうち藩主正倫が上京し、京都藩邸を持たない佐倉藩のために学海が奔走する顛末は「佐

倉藩臨時京都藩邸」と題して描かれている。そして、留守居役から公務人となり、さらに公議人として東京と名を変えた江戸に戻った学海は、「維新政府官吏への道」を歩み始めるのである。

学海が文学史に登場するのは、この十年ほど後のことであるが、著者が「緒言」に言うように「幕末郷土史関係の資料で目にする依田某を、明治になって文学史に登場する学海と結びつける人は、意外に少ない」。本書は、日本史と文学史との架け橋ともなる好著である。

(平成八年七月 筑摩書房 二五四頁 六八〇円)

藤井茂利著

『古代日本語の表記法研究』

——東アジアに於ける漢字の使用法比較——

漢字・漢文による古代日本語の表記を、ひろく東アジア諸言語の表記史の中に位置づけ、とくに古代朝鮮の漢字音や表記法との関わりを論じ続けてきた著者による、研究の集大成である。本書は以下の三章十二編および付録二編からなっている。

第一章 漢字音による表記法の諸問題

第二章 漢文の自国語化表記法の諸問題

第三章 漢字の伝来と運用表記法の諸問題

付録 (1) 濟州島方言表記の問題

(2) 日本方言と韓国方言

第一章では音仮名「富」「品」「叱」「支」をとりあげ、その使用

に朝鮮漢字音の影響のあることを、また、第二章では漢文の形式を脱している「之」「賜」「者」「在」の用法に朝鮮漢文の影響のあることを明快に論じている。

一、二章が原理原則の面を明らかにしようとしたのに対し、第三章ではその運用面に重きが置かれ、渡来者の人名表記や個々の万葉仮名の運用、また、万葉仮名使用の地域差、助辞「之」の万葉集左註や風土記での運用法、等々について示唆に富む論を展開している。また、付録(1)では日本書紀にみえる濟州島の古称「耽羅」のよみを現代濟州島方言をも駆使しつつ追求し、(2)では韓国におけるサツマイモの方言を日本語および中国語の方言との比較を通じて考察するなど、著者の射程の広さがうかがい知られる。

(平成八年七月 近代文芸社 A5判 四一九頁 五〇〇円)

今西祐一郎校注

『蜻蛉日記』(岩波文庫)

新日本古典文学大系『蜻蛉日記』(平成元年)、平凡社ライブラリー『与謝野晶子訳 蜻蛉日記』(平成八年)に続く、今西祐一郎氏による三冊目の校注『蜻蛉日記』が岩波文庫として上梓された。

本書は、従来の定説に一石を投じた校注、新大系『蜻蛉日記』の文庫化ともいうべきものである。基本的には、底本、注ともに、それを踏襲した形のものとなっている。しかし、新大系出版以後の七年という時は、作品に対するさらなる深い読みを氏に求め得たのであろう、要所所で氏の新しい見解を見出すことができる。また、文庫という性格上、新大系よりは簡潔な脚注となっているが、それ

は読者の理解を妨げるほどのものではない。むしろ、新大系に比べ、はるかに廉価で手に入れやすく、使いやすい、という利便性を考えると、難解な『蜻蛉日記』が、さらに多くの読者を獲得し、親しみやすい古典として幅広く世に受け入れられる一助となることが期待できよう。

「解説」では、主に、平安時代における「日記」とは何か、道綱母にとつての「書く」という行為とは、の命題のもとに、平安女流日記の枠を越えた、平安文学史上における『蜻蛉日記』の位置付けが試みられる。なお、同氏には、同じく日記文学についてのより詳細な論文、「私」の位置―土佐日記・かげろふ日記―（『岩波講座日本文学史』2、平成八年）がある。

巻末には「和歌初句索引」を付す。

（平成八年九月 岩波書店 文庫判 本文三三五頁 六七〇円）